

研究ノート

文章表現法の方法

—作文から論文へ—

An Approach to Teaching Academic Writing from Daily Life Writing to Academic Paper

築城 厚三

Kozo TSUIKI

Key words : 文章表現, 文章, 論文, 作文, Academic Writing

はじめに

私の担当する文章表現法では、授業内での課題として文章を書くことを求める。このときの文章とは、まずは論文ではなく、自分のことを他者に伝える「作文」である。また論文は後期の最終課題として設定している。つまり、作文から論文へと進むように展開する。ここでは作文からはじめる意義について述べる。

授業の構成

テーマに沿って学習者が文章を書き、教員が個別に添削返却し全体講評を行う。また、この2つの間に「学習者による相互講評」の時間を設け、執筆作業に取り掛かる前に「メモづくり」の時間を加える。つまり1つの課題に対する授業時間数はおよそ4コマとなる(持ち帰りで添削する時間を除く)。また折に触れてテーマに関連するエッセイや評論などを味わい、感想を書かせる時間も随時設ける。

前期から後期のはじめに関しては自分の経験を他者に伝える作文を課題とし、のち後期に、小論文1~2本、論文1本と進める。毎年40名ほどの受講生に対して、この展開を繰り返す。なお、後期最後の課題は論文としていたので、論文形式の解説、および最終課題のための調べ物、相談の時間として最後の5~6コマ程度を準備する。

これまで行ってきたテーマを抜粋すると、自分の経験から書く文章(作文)として「記憶に残っていること・

ひと」「とにかく○○だった」「わたしのオススメ」「これがわたしだ」、小論文として「一言に対して賛成or反対で意見を述べる」、2000字以上の論文として「自分の考えたいこと(参考文献を1冊以上用いる)」があげられる。

文章を通して自分を見つめる

大学では論理的思考力が求められる。ならば、自分の経験を伝える作文を書くなどといった迂回はず、はじめから論文の指導をすべきかとも思われる。たしかに、テーマに対して、調べてまとめる能力や、論理的に自分の意見を導き出す、もしくは自分の意見を検証する能力は必須である。

ここで注意したいのは、より深く学習する上で大事なことは、むしろ自分なりにテーマを「発見する」ことにあると考えられる点である。

もちろん論文の形を覚えてまとめる能力を身につければ、情報をすり合わせることはできる。また、このことにも学習効果として一定の意味はあるだろう。しかし、学習者が自分と直接関わりがない、もしくは薄いと感じている社会的な問題を論じて、自身にとって、その学習の意味は捉えられにくい。

自分から離れたところで言われているさまざまな言説をまとめるだけに終始し、「小手先の」「ありがちな」意見しか生まない場合が多い。この論は学習者にとって、ただ課題をこなすためのものになる可能性が高い。

人とつながるために思考する

「記憶に残っていること・ひと」というテーマで作文を書こうとすると、学習者は自分の経験を振り返り、その経験がどのような経験であったかを探る。これが自分の中に根を下ろし、じっくりと自分の輪郭を探るような経験となる。このとき、教員はイキイキとしたまたアリアリとした場面で描くよう指導する。なるべく深く広く、自分の内側に光を当ててほしいという思いからである。

「学習者による相互講評」を行う際、うまくいっている作文では「この気持ちはよく分かる」「自分にもこういう経験がある」といった反応を受ける。うまくいかなければ「ここがよくわからない」「なぜここでこう思ったのか分からない」という指摘が多々寄せられることになる。

このことによって学習者はまた言葉を探すために自分の中に視線を戻す。こうして、何度か作文を書くことによって、どのようにすれば自分の経験を他者に伝えることができるのかと、自分と他者との間に言葉をなども巡らせることになる。このとき、学習者は頭を働かせ、自分の内側と外の世界をつなごうとしているといえるだろう。

自分を検証することで外の世界とつながる

こうした自己の表出に対する他者からの応答を通じて、学習者の脳は耕される。自分の内面を描くことで、他者とつながることが可能なのだという実感、またはその模索は、学習者が言葉を探す営みから生じる。ここでの言葉はどこか遠くで言われている言葉ではない。また、よく言われている言葉や表現を使うにしても、自分の感覚に適合しているかどうかを確かめながら使うことになる。

つまり、作文を書くことは、外からの新たな知識や言説で考えを固めるのではなく、自分は何をどう感じているのか、自分の中にあるものはどんなものなのか、自分の内側に分け入って外の世界（他者）と検証する作業である。

ここで学習者は、自分はこういうことを感じる人間だったのか、この経験に関して他者はこのように考えるのか、という気づきを得る。つまり、自分の興味や関心に根ざした「問い」や「考え」が、外の世界と関連していることを発見する。

本質的に考えるために

このように、作文を通して自己の内面を見つめる作業

は、相互に応答することで、結果的に他者とのつながりを意識し、自己の知識や経験をあらゆる角度から検証することを可能にする。つまり、自分や外の世界に対する客観的な目を得る。ここではじめて学習者にとって論文を書く意味が生まれるのではないだろうか。

自分を言葉にすることで本質的に考えはじめる

私の担当する文章表現法は、学習者が本質的に考えはじめるにはどうすればよいのか、という発想から行っている。もちろん、受講生全員が積極的に取り組むということにはならないし、誰もが自分の考えたい論文テーマを導き出せるわけではない。自分を伝えることはなかなか難しく、また内面をさらけ出す勇気も必要である。しかし、これまでの授業展開から、多くの受講生が他者の反応に一喜一憂する生の表情を見る機会に遭遇してきた。少なくともこういった学習者は、その後の課題にも意欲的に取り組む様子が見られる。これは考えることに意味を見出し、「思考」を始めている様子と捉えてもいいのではないだろうか。

本質的に考えるためにはまず自分の内面に目を向け、言葉にすることから始まる。このことを経て学習者は、一人の表情を持った個人として他者とつながり、社会の問題について共に考えることが可能になると考えられる。